白い蝶

岡田三郎助

青空文庫

友の家を出たのは、最早夕暮であった、秋の初旬のことで、まだ浴衣を着ていたが、海の方から吹いて来る風は、さすがに肌寒い、少し雨催の日で、空には一面に灰色の雲が覆い拡って、星の光も見えない何となく憂鬱な夕だ、四隣に燈がポツリポツリと見え初めて、人の顔などが、最早明白とは解らず、物の色が凡て黄ろくなる頃であった。

友の家というのは、芝の将監橋の側であるので、豊岡町の私の家へ帰るのには、如何しても、この河岸通を通って、赤羽橋まで行って、それから三田の通りへ出なければならないのだ、それはまだ私の学校時代の事だから、彼処らも現今の様に賑かではなかった、殊にこの川縁の通りというのは、一方は癩病病院の黒い板塀がズーッと長く続いていて、一方の川の端は材木の置場である、何でも人の噂によると、その当時取払いになった、伝馬町の牢屋敷の木口を此処へ持って来たとの事で、中には血痕のある木片なども見た人があるとの談であった、癩病病院に血痕のある木！　誰れしもあまり佳い心持がしない、こんな場所だから昼間でも人通りが頗る少ない、殊に夜に入っては、甚だ寂しい道であった。

私は将監橋の方から、この黒塀の側の小溝に添うて、とぼとぼと赤羽橋の方へやって来た、眼の前には芝山内の森が高く黒い影を現しておる、後の方から吹いて来る汐風が冷やつくので、私は懐に手を差入れながら黙って来た、私の頭脳の内からは癩病病院と血痕の木が中々離れない、二三の人にも出会ったものの、自分の下駄の音がその黒塀に淋しく反響して、恰自分は

何者かに追われておる様ないやな気持がするので、なるべく歩調を早めて歩き出した。

　すると、突然自分の足に軽く触れたものがある、ゾーッとしたので見ると、一疋の白い蝶だ、最早四辺は薄暗いので、よくも解らぬけれど、足下の辺を、ただばたばたと羽撃をしながら格別飛びそうにもしない、白い蝶！　自分は幼い時分の寐物語に聞いた、蝶は人の霊魂であるというようなことが、深く頭脳にあったので、何だか急に神経が刺戟されて、心臓の鼓動も高ぶった、自分は何だか気味の悪るいので、裾のあたりを持って、それを払うけれど、中々逃げそうにもしない、仕方なしに、足でパッと思切り蹴って、ずんずん歩き出したが二三間行くまた来る、平時なら自分は「何こんなもの」と打殺したであろうが、如何した事か、その時ばかりは、そんな気が少しも出ない、何というてよいか、益々薄気味が悪るいので、此度は手で強く払って歩き出してみた、が矢張蝶は前になり後になりして始終私の身辺に附いて来る、走ってみたらと思ったので、私は半町ばかり一生懸命に走ってみた、蝶もさすがに追ってこられなかったものか、最早何処にも見えないので、やれ安心と、ほっと一息付きながら歩き出した途端、ひやりと頸筋に触れたものがある、また来たかとゾーッとしながら、夢中に手で払ってみると、果せるかな、その蝶だ、もう私も堪え兼ねたので、三町ばかり、向う見ずに馳け出して、やっとのことで、赤羽橋まで来て、初めて人心地がついた、清正公の此処の角を曲ると、もう三田の夜店の灯が、きらきら賑かに見えたのだ、この時には蝶も、あたりに見えなかった、が丁度その間四五町ばかりというものは、実に、一種何物かに襲われたかのような感がして、

身体が、こう何処となく痲痺したようで、とても言葉に言い現わせない心持であった、しかし、それからは先ず無事に家へ帰ったものの、今日まで、こんな恐ろしい目に出会った事は未だにない、今でも独りで居て偶々憶出すと、思わず戦慄するのである。

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選・特別篇　百物語怪談会」ちくま文庫、筑摩書房
　2007（平成19）年7月10日第1刷発行
底本の親本：「怪談会」柏舎書楼
　1909（明治42）年発行
入力：門田裕志
校正：noriko saito
2008年9月22日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

白い蝶

岡田三郎助

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/